

を積極的に入れてやってきました」
六つの部落は、米のほかにも主要作物生産用地化がすすめられている。



金浦農協佐々木組合長

大竹部落は乳牛、肉牛、いちぢく。前川部落は砂丘地灌がいによるそ菜。赤石部落は豚、にはとりの全面協業。飛部部落はそ菜の出荷組合。黒川部落は種もみの採種。町部の金浦部落だけは第二種兼業となっている。とくに赤石部落では六戸の農家が豚百五十頭、にはとり千五百羽を中心に田十二畝、畑一・八畝をまとめた。全面協業が実施され成果をあげている。

共同販売のしくみも確立している。主要作物は部落集荷所に集められ、集荷所から共同出荷所、市場へと直結している。二十四年から納税の申告制度が敷かれたが、税の公平を期すために農協のデーターによって一括申告していることも組合員の団結を固めるに効果があったという。

金浦駅前には二階建の「生産生活センター」がある。婦人部が主役となって運営しているが、集会所のほか炊事室をもち、農繁期の給食のほか冠婚葬祭、その他の会合まで、年間一万二千食の調理仕出しのいっさいをうけている。

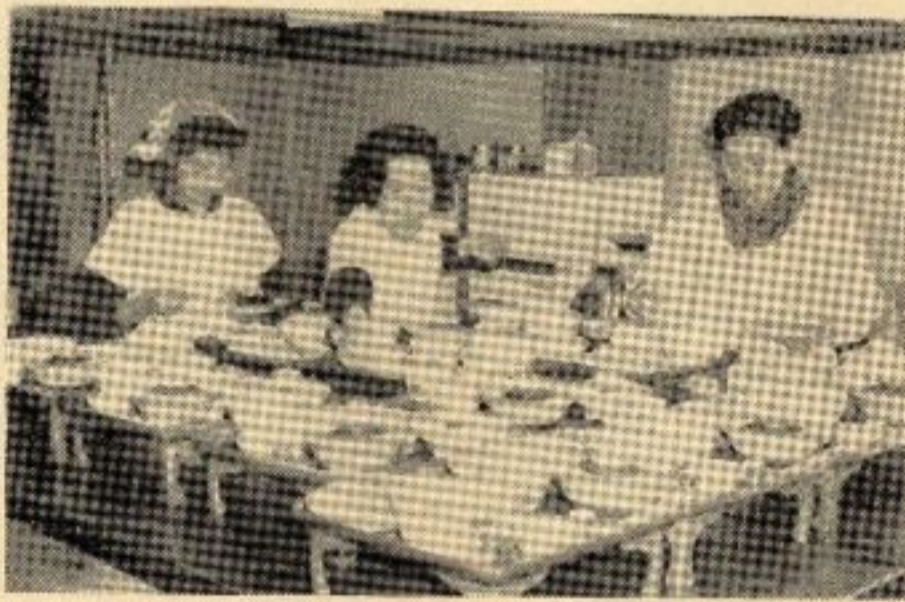
ここの貸衣裳も特色がある。登壇当時

全員が利用するという誓約書をとったというだけあって、現在では八十着。京都の織元からとりよせた、着十万円の花嫁衣裳をはじめ、いずれも個人では負担できない高級品を最低料金で貸すとあって、遠く酒田あたりからの利用もあるという。

指導部長の佐藤さんは、

「内容を魅力のあるものにしてこそ共同の意義がある。婦人部、青年部が結束して、生活合理化まで高まったことは参加しなければ損だと思わせるほど、組合事業が充実してきた結果だとみています」という。

昭和二十九年からはじめた健康管理は毎月一回の血圧測定のほか、年一回の健



康診断の給食など年間一万食が調理される

康診断がある。これに合せて生活センターを活用して食生活改善も積極的にすすめられている。家計簿の記帳も三百十五戸が実施している。

農協には佐藤部長はじめ六人の技術員がいる。普及員の資格をもった生産指導員のほか畜産指導員、生活指導員、土木、共同販売指導員がいる。土木指導は農地改良設計のほか住宅の新築、台所

早生品種でおくて栽培

多収穫日本一の
渡辺重博さん

朝日新聞社主催の昭和四十一年多収穫「米作日本一」の栄冠を勝ち取ったのは、雄勝郡雄勝町小野の渡辺重博さん。

「米作日本一」ときけば、だれしも老練な篤農家を思い浮かべることだろうがこれは型破りの、少年のようにほの紅い、二十七歳の青年。晴れの表彰式には夫婦そろって出席するしきたりだというのが「いまから嫁さんがしではとって間に合わない」と明るく笑う。

「日本一になったからといって、わたしの技術に、なにも特別なものがあつたわけではありません。当り前のことをやって来ただけです。それに昨年の稲の育ち方にはまだ満足していませんし……」と意外といった表情である。

まだ満足しないという昨年の収穫は十町当り八百九十七・八。九百に二・二。欠けただけであつた。

「もしこれまで米作日本一になった人たちが、すべて何か変つたことをやつた篤農家であつたとすれば、わたしの受賞を契機に、なにも変つたことをやらなか

改善の設計だけでなく、時によっては建築資金の金融相談にまで応ずるといったキメのこまかい指導がなされている。

「今は百万円の収入でも五十万円の収入でも生活費のかかり方は同じです。使金から逆算して生産額を伸ばしていこう。これがこれからの新しい農家指導の課題になりそうです」と佐藤指導部長はみている。

「ただの農民がそれをやりとおしたことで誇れる新しい時代の生まれてくることをのぞみます。これがひそかな野心とでもいえましょう」

それにしても、渡辺さんはこの米づくりの基本問題に、具体的にはどのような取り組んできたのか。その前に渡辺さんの耕地条件や経営のあらましを知っておく必要があるだろう。

経営する水田面積は一・一畝、畑十畝、山林三十畝、山羊二頭、鶏二十羽。家族は父母と妹一人の四人だが、農業は昭和三十三年、町の中学校を卒業してから渡辺さん一人で行ってきた。

部落は湯沢駅から北に二・五、国道十五号線から東に入り、部落の入口に小野小町をまつた小町堂がある。

耕地の条件はまったく悪い。かつて雄物川河川敷地であつたよう地上地はくぼみ、下層土にアシの茎、根が混り、その下は十五センチほどの玉石が多く、それだけ排水も悪い。十年前に基礎整備の計画が出されたが、上流部落の協力が得られな